

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

アフリカの人間開発：実践と文化人類学

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-11-18 キーワード: 国際協力, アフリカ 作成者: 松園, 万亀雄, 縄田, 浩志, 石田, 慎一郎 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/10502/4377 |

『アフリカの人間開発』
に関連する読書案内

●
縄田 浩志・石田 慎一郎

NAKATA HIROSHI / SHIDA SHIN-ICHIRO

文化人類学の視点からのおすすぬ著書・論文（五點）

掛合 誠「アフリカ地域研究と国際協力——在来農業と地域發展」（『アジア・アフリカ地域研究』一、二〇〇一年）

深い共感をもつてつきあつてきた西部タンザニアに住むトングウエヤ北部ザンビアに住むペンバといった焼畑農耕民の生活の急激な變化に直面したとき、筆者は「同時代を生きるアフリカ」を深く多面的に捉えるために、地域發展への実践的な関与を通じた地域理解を試みたいと考え、二〇年余りにわたる生態人類学的な研究から国際協力への道を歩み出したと言ふ。JICAの研究協力事業「ミオンボ・ウッドランドにおける農業生態の総合研究」（一九九四～一九九七年）、ソコイネ農業大学地域開發センターとのプロジェクト方式技術協力（一九九九～二〇〇三年）においては、山地斜面の草地を耕地に変えるンゴロ農法を核とした在来農業に焦点をあてて、現地研究者とともに地域農村の実態を現場主義によつて把握し、住民の参加も得ながら「在来性」のポテンシャルを踏まえた地域の發展計画を構想し実践していく道が模索されている。

重田眞義「アフリカ研究と「開發」——研究と実践の実りある關係を求めて」（『アフリカ研究』五九、二〇〇一年）

これまでなぜ、研究者が当該社會に関与し参加することに躊躇してきたのか、あるいは実践家による介入が成功してこなかったのか？ 依然として研究に携わるものと実践を行うものとの間では期待や信頼が先にたつというより、相互の不信が存在するように思えるなか、研究と実践が実りある關係を結ぶための課題について論じている。研究によつて得られた知見や知識を實踐のために有効に活用するといった発想を脱して、開發という営為が外部者と当事者の優れて相互的交流の過程になつていく方向性が示唆されている。また、伊谷純一郎、河合雅雄、川田順造、福井勝義、森淳、鈴木秀夫といった日本人のアフリカ研究者が国立公園の設立、在来知識・在来技術の調査・發展、教育活動といった開發に関わつてきた歴史も紐解いている。

鷹木恵子「マイクログレジットの文化人類学——中東・北アフリカにおける金融の民主化にむけて——」（世界思想社、二〇〇七年）

中東・北アフリカ地域の特にマグリブ三国（チュニジア、アルジェリア、モロッコ）を事例として、文化人類学的なフィールドワークと文献研究から、マイクログレジット、マイクロファイナンスをめぐる現状についてその融資プログラムの多様化や動態性について明らかにし、金融の民主化という観点から検討を試みたものである。(1)比較の手法（一九九九年の同時期にプログラムが開始したマグリブ三国間）、(2)フィールドワークによる情報収集のアプローチ（アンケート用紙を用いた半構造的インタビューとオープンエンド式のインタビューの取り混ぜ）、(3)ホリスティック・アプローチ（対象を取り巻く全体の把握）といった文化人類学の基本的アプローチによって、融資を貧困削減に結びつけていくことの困難さや矛盾点が明らかにされているだけでなく、それを踏まえてなお現実的により効果的である融資手法や改善策を考究する手掛かりが示されている。むすびでは、ジェンダー開発および人間・社会開発との関わり、また金融の民主化にむけた日本の国際協力の方向性についても提言がなされている。

福井勝義「文化人類学からみた地域開発のあり方」（佐藤寛編『援助の社会的影響』アジア経済研究所、一九九四年）

文化人類学はどうして「地域開発」に欠くことができないのか。「土着知識」「土着技術」の見直しと「個別社会の内存在性」重視の立場から論じている。なぜならば、ある地域にたいして、ほんとうに根づく開発援助をしようとするならば、その地域社会が長い間はぐくんできた土着の知識体系を無視してはありえないし、どんな社会にもその社会の論理と生き方があり、それをけっして忘れてはならないからである。したがって、援助対象地域と文化人類学という学問分野との接点をふかめることについて、人類学者の役割はもつと積極的であつてよいとして、文化人類学者のより主体的な関与をうながしている。また、同時期に書かれた小論（福井勝義「開発援助にフィロソフィーを」（『季刊民族学』六三、一九九三年））においても、開発援助に対する四つの提案として、(1)地域住民を最優先する、(2)土着の伝統的知識をいかす、(3)援助対象を国家単位としてきたことの見直し、(4)それぞれの固有の民族社会の存在を相対的に認めること、をあげている。

松園万亀雄「国際協力と人類学の接点を求めて」(『国際協力研究』一五(二)、一九九九年)

欧米の援助機関では、援助事業の実施において人類学(者)の知見を積極的に活用している。それらと対照的に、日本では、JICAと人類学との間に殆ど接点がない。著者は、海外学術調査をとりまく制度・環境の変化、人類学の研究方法じたいの変化、さらにはJICAにおける事業方針の新しい展開にも触れながら、例えば人類学の大学院生を対象にした人材養成事業の提案など、JICAと人類学との間の実質的な協同にむけた具体的な提言を行っている。

その他の著書・論文(筆者五十音順による)

青木澄夫「アフリカに渡った日本人」(時事通信社、一九九三年)

日本の図書館と古本屋に眠るナマの資料を丹念にあたつて、アフリカに移住した明治日本人の足跡をつきとめた著作。世界を無銭旅行し日本初のアフリカ旅行記を記した中村直吉、南アフリカや東アフリカにまで到達していた「からゆきさん」、ケープタウンやダーバンなどに根を張った日本人商人、といった人たちの軌跡から、日本・アフリカ関係のはじまりと近代日本の実態が浮き彫りにされる。

青木澄夫「日本人のアフリカ「発見」」(山川出版社、二〇〇〇年)

幕末から明治・大正・昭和前期までの日本とアフリカの関係・交流の歴史が、豊富な文献資料と図版によって詳述される。アフリカ研究者、政府開発援助・非政府援助機関関係者、ビジネス関係者といった若い世代(現代日本人)が、日本人のアフリカ観の変遷を知り、自身のアフリカへの姿勢を問いただすことによって、日本とアフリカの新しい交流・関係を構築していくことがうながされている。

青柳まちこ編「開発の文化人類学」(古今書院、二〇〇〇年)

小馬徹「キプシギスの女性自助組合運動と女性婚」によると、ケニア・キプシギス社会の「女性婚」は、当事者にとつては、魅力的な選択肢のうちの一つであり、「女性の進歩」に馴染む積極的な側面をも持つ。こうした知見を導く文化人

類学は、地域固有の論理を明らかにすることで、開発現象の診断、解決法の解明に役立つという。

赤坂賢・日野舜也・宮本正興編『アフリカ研究』（世界思想社、一九九三年）

市川光雄「環境問題と地域研究」では、ザイール・イトウリの森で現代社会の支配的な市場経済との間にある種のバッファを設けて、市場経済の破壊的な影響が自分たちの生活や地域の生態系に直接及ぶのを防いできたムブティ・ビグミーの実践を評価し、森林生態系の保護にとつてすでにそこにあるものの活用が重要であることを提起する。富永智津子「アフリカ女性研究の現在」では、伝統社会と女性、開発と女性、都市化と女性、宗教と女性といったテーマごとにアフリカ女性研究の見取り図を描いている。日野舜也「スワヒリ社会調査法」の中では、タンザニア、エヤシ湖畔のマンゴローラでつた和崎洋一の調査方法は「マンゴローラランド」という寺子屋形式の学校を開き、子どもたちに教育の場を提供することによる、スワヒリ社会への村入りの試みであったことを紹介している。

朝日新聞社編『探検と冒険』（朝日新聞社、一九七二年）

戦後から一九七〇年代初頭までの日本人による探検隊・学術調査隊の様子がわかる書物。日野舜也は「アフリカ人の町で暮らしをともしして」の中で「若いわたしたちにとつて、アフリカ人とのくらしは、まさに、礼儀、信義にあつく、客人を丁重にもてなす人びととの、心なごむ生活であった。わたしたちは、たちまち、その魅力のとりこになっていった。日本の青年海外協力隊の若者たちの、アフリカでの活躍は、また、注目にあたいするところである。その熱心さは、二年間で、現地のことばを習得して帰る者が大半、という事実が物語ってくれる。アフリカ人とくらすというテーマからいえば、かれらの生活の記録もまた、真実味のある内容と、貴重な教訓をふくんでいるにちがいない」と述べている。

アマン口述（バーンズ&ボデイ構成、高野裕美子訳）『裸のアマン——ソマリ人少女の物語』（早川書房、一九九五年）

ソマリアに生まれた少女アマン（仮名）が傷だらけになりながら様々な障害を突破して自分の意思をもとに生き抜いていこうとした一七歳までの彼女自身のできごとを語ったライフ・ヒストリー。九歳で割礼を受けたときの感覚や感情が抜群の記憶力でもって明らかにされる。社会にとつてではなく個人にとつて、男性にとつてではなく女性にとつて、大人に

とってではなく子どもにとつて、そして外部者にとつてではなく当事者にとつて、「女子割礼」をとりまく現実とはいかなるものなのか、アマンはその点を描き出す。「これはわたしたちの文化であり、宗教であつて、ほかの国の人たちが他の国の文化を取りあげることなどできないはずだ。もしソマリアの女たちが変わるとしたら、それはわたしたちの手によつて、内部から変わつていかなければならない。(中略) アドバイスするのはいい、でもそれを押しつけてはほしくない」と主張する。

荒木美奈子『女たちの大地——「開発援助」フィールドノート』(築地書館、一九九二年)

ザンビアにて青年海外協力隊村落開発普及員として勤務後、イギリスの大学院で開発学の学位を取得した著者による、女性たちを中心とした村の社会生活の描写と村落開発の実践活動への省察。「援助の『現場』は華やかではない。日々の仕事と生活の連続だ。喜び、怒り、嫉妬、野心、恐れが渦巻いている点では、日本の日常と変わらない。ザンビアでの時は、ゆったりとした流れではあつたが、慣れてくるにつれて、流されていく自分に気づいた。少しずつでも、日常のなかでたまつていく言葉を書き綴つていくことにより、自分や他者を見つめ直したいと思つた」。

池谷和信『現代の牧畜民——乾燥地域の暮らし』(古今書院、二〇〇六年)

東アフリカ、西アフリカ、南アジアにおける現地調査に基づく地域間比較の視点から、現代における牧畜民の多様な生活実態を描き出す。最終章「牧畜民と開発」において、牧畜民の多様性と地域スケールの違いをふまえた開発のあり方を具体的に述べることにより、本書を結んでいる。

池谷和信編『地球環境問題の人類学——自然資源へのヒューマンインパクト』(世界思想社、二〇〇三年)

市川光雄は、熱帯雨林の破壊をめぐる議論を追つていくなから、人間活動を阻害要因としてしか考えてこなかったこれまでの自然保護のあり方の見直しを迫り、地域における森と人の関係の総体を理解する道は、文化生態学、歴史生態学、政治生態学という三つの生態学の観点の統合にあることを示す。門村浩は、「砂漠化」に対する国際的な取り組みにおいて、コミュニティレベルでの土地生産性の向上と修復、土地・水資源の保全と管理などの実現のためには、自然科学と人

文社会科学とにまたがる学際チームの支援の必要性を強調する。山極壽一は、中部アフリカにおいて現金経済の普及によってブッシュコミュニティの捕獲が促進されたことに、自然保護法の改悪や内戦の勃発が加わってゴリラ密猟が起きている現状を報告し、地元の人々の希望や期待を損なわない有効な保護政策のあり方を模索する。杉村和彦は、自然エネルギー利用としてタンザニアの農村に小型風力発電機の設置をした開発プロジェクトの経験を検討することから、現代社会において地域資源をいかした循環型社会を追求する「低エネルギー」的發展への道を見出そうとする。

池谷和信・佐藤廉也・武内進一編『朝倉世界地理講座二ー アフリカI』（朝倉書店、二〇〇七年）

島田周平「アフリカ農村の日常的環境問題」では、砂漠化や森林破壊といった環境問題に対する政治経済の影響が考察される。鷹木恵子「イスラームの女性とチュニジア」では、チュニジアにおける女性解放運動、女性政策、女性の経済格差などについて、アラブ諸国やサハラ以南アフリカ諸国と比較しつつ論じられている。縄田浩志「スーダンの飢餓・内戦へのまなざし」では、中学校の英語教科書にも掲載され日本人社会への影響力が大きい一枚の写真「ハゲワシと少女」（ピュリッツァー賞受賞作品）を題材として、当時のスーダンにおける「飢餓と子ども」の置かれた現状を明らかにしている。

石 弘之『子どもたちのアフリカ——〈忘れられた大陸〉に希望の架け橋を』（岩波書店、二〇〇五年）

ジャーナリスト、国連職員（国連環境計画上級顧問）、外交官（ザンビア大使）としてアフリカの環境と開発の問題を考えてきた筆者が、エイズ、子ども労働、少年兵、FGM（女性性器切除）などの問題を切り口として「最弱者」である子どもたちの現実を浮き彫りにする。「アフリカに何をすべきか」の前に「何をすべきでないか」について注意を喚起している。

石井洋子『開発フロンティアの民族誌——東アフリカ・灌漑計画のなかに生きる人びと』（御茶の水書房、二〇〇七年）

本書は、ケニア中部のムエア灌漑事業区での長期の実態調査に基づいて、上からの経済開発がもたらした顛末を詳細に記述している。著者は、経済自由化のローカルな展開をギクユ社会特有の社会的ネットワーク化の側面等に関連付けな

から検討し、草の根の経済活動の可能性を論じている。

伊勢崎賢治『NGOとは何か——現場からの声』（藤原書店、一九九七年）

本書は、ブラン・インターナショナル（国際NGO）の職員（現地事務所長）として、一九八〇年代後半から九年間にわたり、シエラレオネ、ケニア、エチオピアでの実務経験をもつ著者が、現場で見た開発援助の実態や援助機関が抱える諸問題を批判的に論じている。

伊谷純一郎『大旱魃——トゥルカナ日記』（新潮社、一九八二年）

「一冊の書物にまとめてみよう」と志したのは、それがアフリカの乾燥地帯が内包する宿命的な痼疾との予期しない出会いだっただけからだ。そして私たちは、その危機的な局面で、まさに生死の間を漂っていた人びとと共に、乾いた大地を見つめ無情な天を仰ぎながらすごした唯一の人類学者だったからだ。この旱魃の救済には、ケニアやウガンダの政府はもとより、国際連合や、ヨーロッパ共同体、宗教団体や、各国の平和部隊が動き、また世界各国から救済の資金が寄せられ、食糧や薬品が送られた。私自身も、帰国後ただちに、現地の実情を訴え、ささやかながら救済募金の努力をした。しかし私は、あの旱魃を目のあたりにした一人の人類学者としてのなすべき義務を感じつつづけていた。旱魃は去り、救援の活動は終わった。だが、アフリカの乾燥地帯がもつ痼疾との対決は終わったわけではない。アフリカの自然と人びとの生活を考えようとするとき、この問題を避けて通ることはできないであろう」。

井上忠司・祖田修・福井勝義編『文化の地平線——人類学からの挑戦』（世界思想社、一九九四年）

吉田憲司は、ザンビア調査村の旧知の人びとを訪れると、彼らがエイズやその予防法についての知識を適確に自分たちのものにしてしているのみならず、患者と「ともに生きる」姿勢を感じ取る。そこに人びとがエイズを克服して生き延びる希望を見出す。重田眞義は、「彼らの論理」にもとづく固定した伝統がアフリカ農業の「発展」を阻害してきたという見方を乗り越えるために、科学者の合理・非合理と農民の合理・非合理を相対化しつつ、「彼らと価値を共有できる」道を探る。

今西錦司・梅棹忠夫編『アフリカ社会の研究』（西村書店、一九六八年）

一九六〇年代タンザニア、エヤシ湖畔のマンゴラを中心として実施された京都大学アフリカ学術調査隊「人類班」による人文科学的・社会科学的の研究の報告書。今西錦司は序論において「いまのアフリカは、植民地時代に欧米の学者が、どこへでも好きなどころへ行つて、自由に研究することができたような、そういう意味でのよきアフリカから、刻々と変わりつつある。どこでもそうだが、新しい独立国のナシヨナリズムは、国内のいわゆる遅れた面を、外国人に見せたがらない。人類学者もいまままでどおりの後向きの姿勢で、後れた面を研究するというだけでは、いつしめだしをくわないともかぎらない。これからの人類学者が前向きの姿勢をとる必要は、こういう事情とも関係している。いずれにしても、その国の政府なり、国民一般なりの前向き姿勢を十分に理解し、その動向に同調しながら、われわれもまた前向き姿勢の研究をはじめるときが、遠からずやってくることを、わたくしは願つてやまない。われわれのアフリカ研究が世界のどこに出しても恥ずかしくないものになることを望むとともに、わたくしはまたそれが、アフリカとアフリカ人のためのアフリカ研究になることを期待するからである」と述べている。

大塚和夫編『いまを生きる人類学——グローバル化の逆説とイスラーム世界』（中央公論新社、二〇〇二年）

二一世紀における人類学存在理由（レゾン・デートル）を「同時代性」から探る。エジプトの茶房や食堂への女性進出を題材として考えるムスリム社会における「女性解放」、女性の「人権侵害」として広く告発されている「女性性器切除（FGM）」の慣行の廃絶を目指す地元NGOの活動に焦点をあてて論じる伝統文化への内部批判、「文明化」と「価値の開発」の視点から扱った「文明の衝突」、などが含まれる。

大塚和夫編『現代アラブ・ムスリム世界——地中海とサハラのはざまで』（世界思想社、二〇〇二年）

大塚和夫は、エジプトとモロッコにおける女性のヴェール着用にみる宗教性と世俗性、女性の街頭への進出から男女空間の分離とジェンダー空間の変容について述べる。鷹木恵子は、チュニジア農村部女性が民俗知識・技法を駆使して営む手仕事を、現金収入獲得のストラテジーとしての「内職」と位置づけ、ムスリム女性の経済的自立、社会進出の課題について論じている。堀内正樹は、モロッコの村落社会における伝統的教育システム「マドラサ」再生の軌跡を紹介し、「日

本と同じ近代的なインフラに囲まれ、さまざまな情報を手にする現代人である。それゆえにわれわれがそこに参画し、問題を共有化し、意見を交わしてゆける可能性が開かれている」とする。

緒方貞子『紛争と難民——緒方貞子の回想』（集英社、二〇〇六年）

一九九一年二月から二〇〇〇年二月末まで国連難民高等弁務官を勤めた筆者の回想録（日本語版）である。本書第三章が「アフリカ大湖地方における危機」に充てられており、ルワンダのジェノサイド、難民の流出と周辺国の治安情勢の悪化に対する、さらには戦争から平和・和解への移行過程における国連難民高等弁務官事務所を取り組みが仔細に述べられている。同一筆者による緒方貞子『私の仕事』（草思社、二〇〇二年）は、高等弁務官在任中に発表されたエッセイ、インタビューに加え、二〇〇一年九月のニューヨーク同時多発テロの直後にハーバード大学で行われた講演等を所収している。

小川了『可能性としての国家誌——現代アフリカ国家の人と宗教』（世界思想社、一九九八年）

セネガルにおける国家とインフォーマル・セクターの諸特質に関する分析をもとに、国家（公権力）が直面している困難と、さまざまな局面で交錯する民衆が形成している社会とを、相互の連関のうちに描き出す。独立後アフリカが発展しないのは、過去の奴隷貿易による損失や植民地支配下での搾取を告発するだけで、外からもたらされる発展を待っている援助依存の姿勢であったことを批判し、アフリカ人自身が自ら発展しようとする意思の重要性を示したA・カブー『もし、アフリカが発展を拒否するならば？』について序論でふれている。

小田英郎編『アフリカの二一世紀第三卷アフリカの政治と国際関係』（勁草書房、一九九二年）

千代浦昌道「国際援助の現状」では、一九八〇年代までのアフリカに対する国際援助の現状と課題についてまとめられており、青木一能「日本とアフリカ」では、一九七〇～八〇年代の日本の対アフリカ援助の構図が概観されている。

小田英郎編『アフリカ——ニューズを現代史から理解する』（自由国民社、一九九六年）

アフリカの現代的課題とその背景が網羅的に理解できる著書。アフリカの概観、現代アフリカの歴史的背景、独立と国家建設、構造調整の時代、民主化の九〇年代、内戦・民族紛争・地域紛争、人種問題、政治と宗教、地域協力と地域機構開発と援助、国際関係のなかのアフリカ、現代アフリカの課題、といった章ごとに解説される。望月克哉「開発と援助」では一九九〇年代までの枠組みが示され、落合雄彦「現代アフリカの課題」では食糧問題、人口問題、難民問題、人権問題、エイズ問題、環境問題について簡潔にまとめられている。

片寄俊秀『ブワナ・トシの歌』（朝日新聞社、一九六三年）

一九六一年工学部大学院生であった筆者は自分を売り込み、京都大学アフリカ類人猿学術調査隊に「設営班」隊員として加わる。現地の村人たちに「ブワナ・トシ（俊旦那）」と呼ばれながら、共にタンガニーカ湖畔の調査基地の設営に汗を流し、一つの仕事を成し遂げるまでの一部始終を綴った臨場感あふれる記録。「アフリカは変わりつつある。そしてアフリカ人たちが、外力による変化をしりぞけ、自分の力で成長し始めたとき、彼らの間にはまた民族のリズムが力強くよみがえってくるだろう。それこそ世界に対してアフリカとアフリカ人の存在を高らかに示すリズムなのだ」。

勝俣 誠『現代アフリカ入門』（岩波書店、一九九一年）

北アフリカや西アフリカの旧フランス領、南アフリカの事例を中心として、アフリカ諸国独立以降、現在に連なる政治体制と民主化、部族主義・社会主義・資本主義の関係、政治が作り出す貧困の構図、「北」の国々が押しつける開発と援助の意味、などについて網羅的に具体的に論じ、「どのようにして、アフリカはみずからの将来をみずからのスタイルで切り開いていくのだろうか」と問う。

勝俣 誠『アフリカは本当に貧しいのか——西アフリカで考えたこと』（朝日選書、一九九三年）

一九八二年末から一九九八年までの間に筆者が西アフリカで見聞したことをもとにして、一般読者むけに、現代アフリカ諸国が直面する諸問題について述べたエッセイである。本書は、貧困削減と開発援助の課題を、南北問題あるいはア

フリカと日本との関係から捉える視点等を示している。

勝俣 誠編『グローバル化と人間の安全保障——行動する市民社会』（日本経済評論社、二〇〇一年）

本書は、人間の安全保障と市民社会の新たな役割という観点から編まれている。重光哲明「フランス緊急医療NGOにみる人道的介入」ではルワンダにおいて「国境なき医師団」の緊急医療援助とフランス軍の軍事介入がセットで行われた事例について論じている。林達雄「エイズと人間の安全保障」では医療の商品化と特許重視について批判され、勝俣誠「アフリカにおける人間の安全保障」でも、HIV/AIDS問題を事例として、人間の安全保障の観点からアフリカの課題を論じている。

上温湯隆『サハラに賭けた青春——上温湯隆の手記』（時事通信社、一九七五年）

上温湯隆『サハラに死す——上温湯隆の一生』（時事通信社、一九七五年）

一九七四年、二二歳の若者が一頭のラクダとともに単身サハラ沙漠横断旅行に挑み綴った日記。「サハラよ！俺は不死鳥のように、お前に何度でも、命ある限り挑む。正直に、お前に語ろう。恐怖におおわれた闇、お前の体に抱かれていた夜に、何度“死”という言葉が脳裡で舞ったか。果てしなき砂の中、道もなく、人も住まぬ所で、わが友とするラクダが、別の世界へ去ったら……考えるだけでも恐ろしい。しかし、それが貴様の魅力だ！だからこそ、俺は貴様の虜になった。敵愾心に燃えた心に、ふと恐怖の黒い雲が現れても、俺はそれを乗り越えて、この足は地平線の彼方へと一歩ずつ近づく。「冒険とは可能性への信仰である」こうつぶやき、俺は、汝を征服する。必ず貴様を征服する！それが貴様に対する、俺の全存在を賭けた愛と友情だ」。

亀井伸孝『アフリカのろう者と手話の歴史——A・J・フォスターの「王国」を訪ねて』（明石書店、二〇〇六年）

「アフリカろう教育の父」と呼ばれるアメリカ出身の黒人ろう者アンドリュー・フォスターとその弟子たちが築き上げた「ろう者によるろう者のための世界最大級の教育事業」の全容を描くエスノグラフィ。「低開発アフリカの障害者ですか。さぞかし大変でしょうね」、「アフリカには未発見の手話があるのでは？」といった両極端な周囲の期待、反応を裏

切り、乗り越えて、文化人類学に対して、ろう教育に対して、開発政策に対して、歴史法則の解明に向けて、ろう者が主体的に切り拓いた手話による教育を通じた幸福追求の意味を問いかける。

河合雅雄『サルが目 ヒトの目』（平凡社、一九八〇年）

アフリカのゴリラ、ゲラダヒビの研究で知られる霊長類学者によるエッセイ集。「発展途上国への援助」（初出一九七七年）では、当時、海外で活躍する商社マンの基礎的教養の不足は、「異人種との接触の仕方や理解について、ほとんど学ぶ機会がなかったからである。こういう問題を扱う学問に人類学があるが、国立大学に文化人類学の講座が一つもないという悲惨な実情を見れば、商社マンの基礎的教養のなさをいちがい責めるわけにはいかない」と日本社会に対する人類学の重要な役割を明確にしている。一方「途上国について言えば、何を与えるかについて一つ提案したい。それは教育と文化関係のものを無償で供与することである」とし、エチオピアのオモ国立公園の建設に生態学者よりなる専門家を派遣した海外協力事業団（現在の国際協力機構）の姿勢を評価して「文化援助の一つのモデルを作ってほしい」とエールをおくる。また、途上国の子どもへの教育・文化レベルの向上に小学・中学・高校の教員を派遣することは、日本の青少年に国際感覚を植えつけることにも貢献すると述べている。

川田順造編『アフリカ入門』（新書館、一九九九年）

「私などが電気も水道もない村の人たちとのつきあいのなかで吸う『アフリカの毒』にあてられた立場からすれば、むしろ一元化され硬直した開発思想、現在地球規模の数々の難問のなかで、明らかに行きづまりに陥っている開発のあり方を、アフリカの毒を解毒剤として、根本から、生きることの意味にまでさかのぼって問い直すことが、いまこそ必要だと思ふのだ。そのような、決して容易ではない作業は、「伝統を保持しながら開発に成功した」という神話の烙印を押された私たち日本人が外来の触媒となって、アフリカ人のためではなく、日本人も含む世界の人々のよりよい未来を模索するために、アフリカの毒のなから有効な成分を取り出す努力をすべきだと思ふのだ。アフリカの毒が、ほかならぬアフリカの人たちによっても否定され、消え去ってしまわないうちに」という編者の問題意識から生まれた、二七人の執筆者陣によるアフリカ入門書。

川田順造・上村忠男編『文化の未来 開発と地球化のなかで考える』（未來社、一九九七年）

佐藤章「アフリカ——政府の限界と個人の生存」では、アフリカ諸国の政府が経済発展をどのように実現できるのか、政府の限界を指摘することにより現行の開発パラダイムの超克を目指す。勝俣誠「世界のなかのアフリカ」では、アフリカ諸国は開発目標に対して社会を巻き込むことに成功しなかったことが指摘されている。

川田順造ほか編『岩波講座 開発と文化』（岩波書店、一九九七～一九九八年）

『いま、なぜ「開発と文化」なのか』（一九九七年）で、小馬徹が、ケニアの農牧民社会における開発概念の歴史的背景・社会文化的特徴を述べている。『反開発の思想』（一九九七年）では、大塚和夫が、スーダンにおける政治・社会的開発に対する地域住民の評価が、経済的開発に対するそれと異なる点を、価値の普遍性と個別性の観点から検討している。『開発と民族問題』（一九九八年）では、勝俣誠が、セネガルを事例に、アフリカにおけるグローバル化ならびに経済開発とナシヨナリズムとの関係について論じている。『地球の環境と開発』（一九九八年）では、青木克己が、アフリカ諸国における水資源開発が生態系に与える影響、ならびにそれによってもたらされる疾病の流行について批判的に検討している。『人類の未来と開発』（一九九八年）では、鈴木博が、ニジェールでの音楽活動支援について、海外青年協力隊員ならびに国連ボランティアとしての自らの経験を紹介している。

川端正久『アフリカ人の覚醒——タンガニーカ民族主義の形成』（法律文化社、二〇〇二年）

タンザニア、タンガニーカ民族主義の形成を事例にアフリカ人の民族主義について論じる。アフリカ人組織による民族主義的運動がどのように展開されていったのか理解される。

川端正久・落合雅彦編『アフリカ国家を再考する』（晃洋書房、二〇〇六年）

アフリカ・ルネサンスと呼ばれる、政治の民主化、新しい指導者の登場、経済成長、投資と貿易の増加、市民社会の形成、紛争の防止と解決、地域協力の発展を検討する。民主化については、タンザニアやザンビアの最近の動向が詳しく紹介されている。

川那部浩哉監修・堀道雄編『タンガニカ湖の魚たち——多様性の謎を探る』（平凡社、一九九三年）

アフリカ大地溝帯の湖タンガニカ湖研究チームの一五年間の研究の歩みと成果をまとめたもの。一九八五年からはJICAと日本学術振興会の国際共同研究による調査プロジェクトも加わって、毎年数名ずつの日本人研究者が現地調査に赴いた。自然ないし野生生物の保護とは何かについて川那部浩哉はいう。「野生生物は、長い地球の歴史の中で徐々に徐々に、他の生物との、また非生物的環境との、相互作用によって作られてきた。自然とは、逆にいえば、ヒトを含めた生物と非生物的環境とが、相互作用によって作り上げてきた総体である。それは基本的に、あらゆるレベルでの多様性を大きくする方向へ向かって、ゆっくりと自律的に変化してきたものである。したがってその保護とは、正にこれら総体の、また、総体としての、保護に他ならない」。

神戸俊平「熱血！！ 動物のお医者さん」（ポプラ社、一九九一年）

小学生の頃、父の本棚に並ぶ探検記・冒険談の本を読みあさりアフリカのピグミー族やマサイ族と暮らす空想をする。「おおきくなったら、なにがしたいか」という宿題に「一番目、獣医になること、二番目、アフリカで生活する」。ケニア、ナイロビの動物孤児院で働きながら、日本人獣医第一号となる。当地で獣医を開業してマサイ動物診療所で働く様子をのびのびと平易な言葉で児童向けに書き下ろした図書。

神戸俊平「サバンナの話をしよう——獣医・俊平のアフリカ日記」（時事通信社、一九九九年）

ケニアの動物孤児院での活動、マサイのウシを守るツエツエバエ・コントロール、野生動物、環境保全の分野に「アフリカと神戸俊平友の会」の支援で活動を続ける。アフリカ初渡航から二八年の活動の記録。「サバンナに消えつつある住民の知恵を学びたい。自然の中で声にならない動物や植物の悲鳴に、耳を傾けていきたい」。

岸上伸啓責任編集「特集 先住民と開発」「民博通信」一一七・一一七（国立民族学博物館、二〇〇七年）

岸上伸啓「先住民の開発へのかかわり方と人類学研究」、細川弘明「開発とアポリジニーをめぐる果てしない物語」、丸山淳子「開発」だけでも、「伝統」だけでもなく、井上敏昭「アラスカの石油開発と生住民」、吉田睦「西シベリア・ネ

ネツのトナカイ牧畜」、貝澤耕一「沙流川流域に住むアイヌ民族とダム建設」、リーディング・ガイドが掲載されている。アフリカの事例としては丸山淳子がボツワナにおけるセントラル・カラハリ・ゲーム・リザーブにおけるサンの住民移転について考察している。また民博通信一一二号（二〇〇六年）には鈴木紀責任編集「フィールドとしての開発援助」があり開発援助活動に対する人類学者の貢献の可能性が論じられているが、アフリカの事例は含まれていない。

北川勝彦編「アフリカ——国民国家の矛盾を超えて共生へ」（大月書店、一九九九年）

津山直子が自らの経験に日本のNGOによる南アフリカでの開発援助事業の現状と課題を報告し、藤本義彦は援助の前提条件として要請されるようになった民主化についてアフリカ諸国を概観し、望月克哉はアフリカ諸国における一九八〇年代以降の経済危機と経済開発の諸制約について述べ、北川勝彦がアフリカ諸国と主要援助国・国際機関との関係の現状について概説している。

栗田禎子「近代スーダンにおける体制変動と民族形成」（大月書店、二〇〇一年）

スーダン共和国の一九世紀前半以降の近現代史を体制変動と民族形成の視点から論じた歴史書。近代社会システムの底辺に位置づけられたスーダンの社会変容、変革主体の形成、体制の成立・維持・変質過程が、スーダンにおける「民族」のあり方の問題を追及することにより、包括的な形で検討されている。「南北」内戦や「ダールフル」問題といった現代スーダンの課題を理解するのに不可欠な視点を獲得することができる。

栗本英世「民族紛争を生きる人びと——現代アフリカの国家とマイノリティ」（世界思想社、一九九六年）

スーダンのパリ、エチオピアのアニユワの視点から民族紛争を描きつつ、「困難な状況のなかで、自分たちの誇りを守りつつ生き残るために闘っている、パリやアニユワの人たちに対する共感と、死んでいった友人たちに対する鎮魂と憤激の思い」を吐露した、アフリカの現代的な政治・軍事紛争に関する実験的な民族誌。

国際開発センター「特集／アフリカ農村開発」開発・援助問題実務者のための理論情報誌 IDCFORUM 二二号（財団法人国際開発センター、二〇〇二年）

実務経験の豊富な執筆者たちが、アフリカ農村開発の基本的考え方、アフリカ農村開発の手法、参加型農村開発のあり方、農村開発における政府の役割などに関する一〇論文を執筆している。なかでも田中清文「人類学に学ぶアフリカ社会を見る視点」においては、農村理解の視点を人類学から学んで農村調査に生かすための枠組みが提示されている。外部の調査者による知の略奪という支配・被支配の関係を超えるために、地域の人々が主体となつて調査を行うという参加型農村調査手法が発展してきたが、現実においてはあまりに効率主義的に短期間に目的志向型の要領の良い農村調査を行おうとする危険性がある。また、外部者が地域の人々に成り代わつて枠組みを設定したり、地域の人々が外部者による影響されて外部者に合わせて答えをしてくる危険性も伴っている。このような現実を乗り越えるために、人類学者による長期にわたる参与観察からしか見えてこないファクターを重視する必要がある。アフリカの人々の歴史と文化を学び、アフリカの人々と同じ目線でものごとを見て共感しあえるような関係を築いて、たとえば効率は悪くとも人々の語りにつickりと耳を傾けるようなライフヒストリー調査を実施することを提言している。

国際協力事業団「サブ・サハラ・アフリカ諸国における基礎教育の現状と日本の教育援助の可能性——報告書」（国際協力総合研修所、一九九七年）

日本は、一九九六年（DAC新開発戦略）に、高等教育・職業訓練中心の教育支援から、基礎教育（初等・中等教育）分野に対する支援への移行、さらには教育援助分野におけるアフリカ重視などを表明した。本書は、そうした動向を背景に、一九九六年六月から一九九七年九月にかけて実施された研究会の成果報告書であり、アフリカに対する日本の教育援助の際の「基礎検討資料」とすることを目的として刊行されたものである。本研究会には、JICA専門家他に人類学者も参加した。本書は、総説の他、国別教育概要、日本の教育支援の概要、文献・データベースを一覧を所収している。

国際協力事業団「サブ・サハラ・アフリカにおける農業開発協力のあり方に関する基礎研究」(国際協力総合研修所、一九九七年)

独立後のアフリカ諸国では、工業化に重点が置かれた反面、輸出換金作物以外の農業部門が軽視されてきたことへの反省がなされた。本書は、一九九六年七月から一九九七年八月にかけて実施された研究会の成果報告であり、アフリカに対する「今後の効果的な農業開発協力のあり方の検討に資する基礎資料」とすることを目的として刊行されたものである。

湖中真哉「牧畜二重経済の人類学——ケニア・サンプルの民族誌的研究」(世界思想社、二〇〇六年)

本書は、ケニア中北部のサンプル社会における長期の人類学調査に基づいて、一九九〇年代の地域経済における家畜、家畜商、家計の実例を分析し、市場経済と生業経済とを独自の様式で組み込む総体としての「牧畜二重経済」の有り様を明らかにしている。結論部では、サンプル社会における「開発政策に関する提言」として、内発的發展としての牧畜二重経済の実態に即した開発計画が求められることを述べている。

小堀 巖「サハラ沙漠——乾燥の国々に水を求めて」(中央公論社、一九六二年)

一九六一年サハラ沙漠のオアシスを踏査し、水利体系フォガラ、ナツメヤシ農業、人びとの生活を記録した調査録。政府高官、学者、村人といったさまざまな人びととの出会いと会話による触れ合いの様子が生き生きと描かれている。アルジェリア中部アウレフでは、農業指導に携わるハジ青年と初めて出会った時のエピソードがある。筆者はそれ以来半世紀近くの交流を続けて、伝統的な水資源管理フォガラの記録と保全、サハラ・オアシス社会の発展のため共に力を注ぎ続けている。

小堀 巖「乾燥地域の水利体系——カナートの形成と展開」(大明堂、一九九六年)

サハラ・オアシス、西アジア、中国、アラビア半島などでの四〇年以上にわたる現地調査と比較研究により、乾燥地域のカナート(地域によりカレース、ホッタラ、フォガラなどと呼ばれる)水利体系の起源、分布、灌漑技術の特色、水資源管理との関連などを明らかにした著作。「私としては、本書にもられたような地味な研究調査の成果の一部でも、地元

に還元されて、土地の人々に恩返しできることを研究者としては目標としなければならぬと常々考えており、今でもサハラのおアシスなどで悪戦苦闘している。その意味では、身体が動く間は、現地調査を踏まえた研究の深化と、まともにこれからも精進してゆきたい」。

坂本 達『やった。』（三起商行株式会社、二〇〇一年）
坂本 達『ほった。』（三起商行株式会社、二〇〇六年）

入社四年もたらず四年以上の有給休暇を与えられ、五万五千キロを走破し「自転車世界一周」という小学生の時から夢をかかえた。ギニアでマラリアと赤痢にかかった時、村人の献身的な看病で命をとりとめ、「人間は生きているのではない。生かされている」ことを知る。本の印税を資金源として、ギニアの村の命の恩人たちへの「恩返しプロジェクト」を興し井戸を掘る。井戸が完成した時、恩人が言ったことは「タツのおかげで村に井戸ができて本当に感謝している。でもタツが毎年、僕たちのことを忘れずに会いに来てくれることが実は一番嬉しいんだ」。体験談を全国の子どもたちに話す講演活動「日本縦断夢の架け橋プロジェクト」も続ける。

澤村信英編『アフリカの開発と教育——人間の安全保障をめざす国際教育協力』（明石書店、二〇〇三年）

人間開発における代表的アプローチのひとつである人間の安全保障について、教育開発分野で議論を行った論文集として刊行された。編者によると、アフリカ諸国では、一九六〇年代は開発一般について比較的良好な展望が得られ、教育普及も進んだが、一九七〇年代半ばからの経済低迷が教育開発の停滞を招いた。本書は、一九九〇年代以降の教育重点化の動向を踏まえ、マラウイ、南アフリカ、ガーナ、ケニア等での教育支援の具体的事例を紹介している。また、コートジボアール、ガーナ、ナイジェリア、ケニア、タンザニア、ザンビア、ジンバブエ、南アフリカについて、各国の教育開発上の課題を個別に概説している。

澤村信英『アフリカの教育開発と国際協力』（明石書店、二〇〇七年）

青年海外協力隊員（マラウイ、理数科教師）、国際協力事業団（現国際協力機構）職員を経て大学教員を務める筆者が、

国際教育協力の研究と実践に寄与するためにアフリカの教育開発および国際協力を総合的に分析した著書。アフリカの教育開発と日本の教育協力に関する比較研究、アフリカ四カ国（ガーナ、エチオピア、ケニア、ザンビア）における教育を取り巻く諸問題の事例研究、ケニアにおける学校レベルの教育開発研究、からなる。

島田周平「アフリカ可能性を生きる農民——環境・国家・村の生態研究」（京都大学学術出版会、二〇〇七年）

アフリカの農業開発の新しい視点と方法論として、ポリテイカル・エコロジー論を参照しつつ、ナイジェリアとザンビアの複数の農村の比較研究から、マクロな分析とミクロな分析結果をあわせていくことによつて、農民たちの日常生活における「可能性を生きる農民」の姿を理解していこうとする著作。

嶋田義仁「優雅なアフリカ——一夫多妻と超多部族のイスラム王国を生きる」（明石書店、一九九八年）

カメルーン国北部のレイ・ブーバ王国の今を生きる人びとの具体的な生を描き出す。「アフリカの開発や援助にたずさわる人びとがその障害とみなしがちな問題」である「ドレイ制、一夫多妻、伝統的王権、イスラーム、牧畜民などの、近代的価値観からすると負のイメージを負った諸現象」が、一別の側面をも持っていること、別の理解の仕方もあること、そこには近代世界が忘れていた人間社会の新たな可能性を示すものがあるかもしれないこと」を、現地の若者を中心とした人びととのふれ合いによる豊富なエピソードから語っている。

末原達郎「人間にとつて農業とは何か」（世界思想社、二〇〇四年）

コンゴのテンボ社会の農業について現地調査を続けてきた著者が、フランス、日本社会における農業と社会の関係と比較しつつ、人間にとつての食料とは何か、農業とは何か、地球規模で農業を考えると、農学研究におけるフィールドワークの方法論、などについて論じる。

末原達郎編「アフリカ経済」（世界思想社、一九九八年）

構造調整についての比較的最近の刊行物である本書は、一九八〇年代以降の構造調整政策がアフリカ諸国に与えた影響

について、近年に至る展開も含めて国別に論じた概説書である。

杉村和彦『アフリカ農民の経済』（世界思想社、二〇〇四年）

ザイル川中流域の焼畑農村における、村落社会の組織原理、商品経済との連関、農民経済の重層構造、村落内部での農民間の差異化の構造、消費構造の特質などを具体的に描き出す事例研究に基づき、従属論的視角の限界とアフリカ小農世界の可能性を検討している。

杉山幸丸『アフリカは立ちあがるか——西アフリカ自然・人間・生活探訪』（はる書房、一九九六年）

西アフリカで野生チンパンジーの現地調査を二〇年以上継続してきた霊長類学者は、アフリカは「何かが根本的に変わらなければならぬ」という気持ちを抱く。自らが経験した政治、社会、行政、人間生活に対する観察をもとに、私腹を肥やす官僚組織から脱却し、新しい国造りのために「部族を越え、宗教を越え、人々のためにこそ全力を尽くす」リーダー養成を乞う。またそのための幅広い教育の充実を提言する。

世界経済調査会編『アフリカの研究』（世界経済調査会、一九六一年）

本書は、最終章を「経済開発と援助」に充て、開発計画の個別事例の概観、二国間援助や世銀等の国際機関による援助の動向を紹介している。

高梨和紘編『アフリカとアジア——開発と貧困削減の展望』（慶應義塾大学出版会、二〇〇六年）

本書は、アフリカにおけるIMF・世銀政策（坂本浩二）、ウガンダの都市における食糧供給問題（吉田昌大）、HIV／エイズが農村社会に与える影響（島田周平）、セネガルの開発政策と落花生部門の動向（勝俣誠）、アフリカ諸国におけるマイクロファイナンス（高梨和紘）の事例研究を通じて、貧困削減の課題を論じている。

高根 務編『アフリカの政治経済変動と農村社会』（アジア経済研究所、二〇〇一年）

本書は、一九九〇年代のアフリカ諸国における種々の政治経済変動（構造調整・市場経済化・複数政党制の導入、紛争・内戦による政治的混乱など）と農村社会との相互関係について、ルワンダ（武内進一）、南アフリカ（佐藤千鶴子）、ケニア（津田みわ）、コートディヴォワール（佐藤章）、ガーナ（高根務）、ザンビア（杉山祐子）、エチオピア（兄玉由佳）、タンザニア（上田元）の実例を分析している。

高橋 悟『沙漠よ緑に甦れ——ジブティ共和国十年の熱き戦い』（東京農業大学出版会、二〇〇〇年）、東京農大沙漠に緑を育てる会編『ジブティの沙漠緑化一〇〇景』（東京農業大学出版会、二〇〇〇年）

風土に基づく技術を開発し、そこにある自然の復元力を最大限に發揮させ、沙漠の生態系を徐々に改善することにより、海外援助に頼らず永続的に農業生産ができる方式の確立を目指して、一九九一年からジブティ共和国において継続されてきた沙漠緑化活動・研究の記録。

高橋基樹『アフリカにおける開発パートナーシップ——セクター・プログラムを中心に』（国際協力事業団、二〇〇一年）
本書は、従来の援助側主導のプロジェクト支援にかえて、セクター・プログラム（セクター・ワイド・アプローチ）が導入されるようになった一九九〇年代以降の動向とその歴史的背景を概観する。また、現段階での問題点をオーナーシップ等の点から検討したうえで、今後の課題として、援助側と非援助側との協調関係の確立や情報共有、非援助側のプログラム担当組織の能力強化などに向かう必要性を指摘している。

高村泰雄・重田眞義編『アフリカ農業の諸問題』（京都大学学術出版会、一九九八年）

坂本慶一は、アフリカ農業の危機的状況を打開する道として、伝統的食料生産農業が内発的發展の可能性を秘めていることを指摘し、この可能性を促進するための諸条件として、農業・農村協同組合の組織化、教育の普及、経済的先進諸国による適切な協力（ODA）の在り方について触れている。重田眞義は、遅れたアフリカ農業を改良しなければならぬという近代化論の呪縛、森林破壊の元凶は焼畑とする際の科学実証主義的研究のあやうさ、などを指摘した上で、在来農

業と在来作物の見直しの意味を問い、科学者と農民が学びあうための場としての在来農業科学の解釈を指摘している。太田至は、東アフリカの牧畜社会に対する従来の開発援助が、乾燥地域の生態学的特徴を「環境収容力」の概念等で単純化・一般化したことよって、かえって様々な弊害をもたらした点について批判的に検討している。高村泰雄は、現地調査から明らかになったアフリカ農業研究の課題として、食糧自給の道、伝統的農業を基盤とする農村社会とその変容、作体系研究と作物の品種改良の問題、農村の持続的発展と環境保全の両立などについて論じている。

田口幸子「カルツーム便り——体験した南北問題」(サイマル出版会、一九八二年)

国際協力事業団の青年海外協力隊事務局で働いた後、日本人女性で初めての国連開発計画職員として、一九七九年スーダンに赴任。一年間首都カルツームを中心として、農業指導、砂漠緑化、難民支援などの事業に携わった際に「現場に出て実際に体験して思うこと」を率直に書き綴った著作。当時の、国連機関の活動、援助協力の実態、スーダンの様子がよくわかる。

武内進一編「現代アフリカの紛争——歴史と主体」(アジア経済研究所、二〇〇一年)

現代アフリカの紛争を主題とする本書は、一九九〇年代後半のケニアにおける民族間抗争(松田素二)、複数政党制移行後のケニアの住民襲撃事件(津田みわ)、一九六〇年代のブルンジにおける「エスニシティ」と対立(佐藤章)、ルワンダ史におけるツチとフツ(武内進一)、リベリアにおける市民概念(真島一郎)、スーダン内戦における多様なアクター(粟本英世)の事例研究を所収している。また、巻末に、コフィ・アナン国連事務総長(当時)による「国連事務総長報告——アフリカにおける紛争の諸原因と永続的平和および持続的発展の推進」の文献解題(原口武彦)を所収している。

田中二郎「最後の狩猟採集民——歴史の流れとブッシュマン」(どうぶつ社、一九九四年)

アフリカ南部カラハリ砂漠に生きる狩猟採集民ブッシュマンに近代化の波が押しよせた一九七〇年代以降の行動様式や価値観の変化、とくに定住化政策の影響に焦点をあてる。その上で、テクノロジーを優先させる生活改造や近代的な集約農業・牧畜経営にそぐわない同地において、「現地にある素材で、現地の人たちがこつこつと働いてゆけばできそうな現

実味のある方法」として、これまで利用してきた野生植物の半栽培的な畑をつくる「生態農場」を提言している。それは「客観的に成りゆきを観察する冷やかな目をもちながら、みずからもその社会にコミットしてゆかざるをえない状況があり、それをなすことはこの社会にかかわってきた研究者の、人間としての責任であるかと思う」からである。

田中由美子・大沢真理・伊藤るり編著『開発とジェンダー』（国際協力出版会、二〇〇二年）

ジェンダーの視点に立った国際協力に向けて「開発と女性」（WID）、「ジェンダーと開発」（GAD）の枠組み、またジェンダー分析、ジェンダー評価の方法などを紹介した概説書。アフリカを舞台としたケース・スタディーとして、西田良子によるガーナにおけるリプロダクティブ・ヘルス、荒木美奈子によるタンザニア・キリマンジャロにおけるジェンダーと労働、野田直人によるタンザニアの社会林業とジェンダー、及位満枝による女性性器切除（FGM）廃絶に向けて、といった内容が含まれる。

マイケル・M・チエルネア編（開発援助と人類学勉強会訳）『開発は誰のために——援助の社会学・人類学』（日本林業技術協会、一九九八年）

社会科学の知識がどのように開発プロジェクトに生かされるのか、具体的な方法論、事例を豊富に紹介しながら、世界の銀行の社会政策・社会学担当上級顧問チエルネアのもとに開発事業における「人間重視」の立場を明示した著作。ケニアの牧畜生産システムと畜産開発プロジェクトについて論じた人類学者ダイソン・ハドソンによる論文がある。「社会学人類学を開発計画主導の現場に取り入れようと努力しつづけることは、確実に意味のあることである。開発は、人間の、人間による、人間のためのものである。その開発が今ままであまりに経済活動としてのみ、偏ってとらえられてきたという事実を考えれば、人間の事業である開発の全段階に人文科学を取り入れることは、プロジェクトの全段階に経済学者を取り入れることに劣らず、十分理論的なことと言える」と述べている。

富川盛道『ダトーガ民族誌——東アフリカ牧畜社会の地域人類学的研究』（弘文堂、二〇〇五年）

一九六〇～一九八〇年代にかけてタンザニアの中北部エヤシ湖畔のマンガローラを中心として展開した東アフリカ牧畜社

会の地域人類学的研究の集大成。筆者は「森の診療所」で医療活動を行い地域住民との関係を構築しつつ、現地調査に従事した。「これはほんまに治ってほしいと思うからやっているんや」。伝統的な文化の象徴である皮のスカートをかなぐり捨てて外社会に去った若いある女性の半生を描いたエッセイ「一枚のスカート」は、「世が世なら、ダトーガ社会のなかで、平凡に、つつながなくその生涯を送ったであろう、ひとりの女性が、大きな、そこからの社会変化のなかに巻き込まれ、あるいは、その変化を先取りしてたくましく生きていく姿を通じて、ダトーガへの富川さんなりの挽歌をえがいた」ものである。「アフリカ研究を志す若者はもちろん、異文化もふくめて、さまざまな人生に、大きな好奇心を抱く人びとは、この著作を通して、人間の多様性と共通性、人びと個人、個人のかげがない生き方に、好奇心を持って、思いを寄せていただきたい」（日野舜也）。

中村千秋『アフリカで象と暮らす』（文藝春秋、二〇〇二年）

「アフリカのような第三世界といわれるところで、人々のためになる仕事をしてみたい」「アフリカで仕事をするのなら、一番大きいゾウに関することを一生の仕事としてやってみよう」という中学生の頃の夢をかなえる。ケニアのツァボ・イースト国立公園を拠点に、非政府組織に所属して野生ゾウの現地調査・保護活動に従事する現場での様子をわかりやすく紹介する。

西田利貞・上原重男・川中健二編著『マハレのチンパンジー——ハンスロポロジ—の三七年』（京都大学学術出版会、二〇〇二年）

チンパンジーの餌付けに成功して以来三七年間、タンザニアのマハレにおいて継続してきたチンパンジー研究の集大成。マハレ山塊国立公園は、日本の援助によって日本以外の国で誕生した最初の国立公園であり、長い年月にわたる地道な学術的研究が、地域住民の協力のもと具体的な保護策に結びついている成功例として意義深い。日本人による研究と自然保護活動、また記録や報道が密接に連携しながら発展してきた足跡をたどることができる。

野口英世記念会編集『野口英世——人類のために フォトドキュメンタリー野口英世博士生誕一二〇年記念写真集』（野口英世記念会、一九九六年）

黄熱病研究のため、ガーナ、アクラの研究所に着任したのは一九二七年。翌年には黄熱病に倒れ、五一歳で殉職。医学を通じた人類への貢献を果たした野口英世を記念するガーナ大学野口英世医学研究所は、日本政府の援助によって、福島県立医科大学が協力して出来た研究所で、日本とガーナとの医療交流に貢献する。

野田直人「タンザナイト——僕の職場はタンザニア」（風土社、一九九九年）

大学卒業後、青年海外協力隊に参加して二〇年あまり、中米、アジア、アフリカで国際協力事業団専門家として植林など林業関係の国際協力に従事する。タンザニアの自然環境、社会、文化、そして現地の人々と仕事をする職場の様子が手に取るようにわかる。「じつは途上国における開発の仕事とは、そこにかかわる地域住民も、僕たちのような外部の専門家も、共に学びながら、共に自分自身の内側から開発して行く、そうした共同作業であり、そこに醍醐味がある」。

野田直人「開発フィールドワーカー」（築地書館、二〇〇〇年）

「人類学を学んでいるのですが、開発の役に立ちますか？」といった質問を最近よく受ける。経済学を学んでいる人の多くは「役に立つに決まっている」と信じているようで（偏見）、これはこれで困り者なのだが、基本的には役に立たないことなどほとんどない、と筆者は考えている。しかし、それがどの分野であれ、また複数の分野を組み合わせたとしても、それだけで開発における問題が解決されることはまずありえない。学問は学問、現実には現実なのである。学問と実際の開発との違いをよく認識しておく必要があるし、それをきちんと把握していれば、何を学んでも大きな迷いは生じないのではなからうか。「学問は単純化により法則を見出すが、開発は多様性を相手にしなくてはならない」一言で言えばこれが違いである。」

林 晃史編「アフリカ援助と地域自立」（アジア経済研究所、一九八八年）

一九八〇年代、アフリカ諸国の経済の安定化を目的として、世銀・IMF主導の構造調整政策（経済自由化等の制度改革

革を付帯条件とする援助政策)がアフリカ諸国に導入された。これに応じて、構造調整が諸国に与える様々な影響についての研究が相次いで行われた。本書は、(1)ドナー側の援助の役割と(2)国をこえた地域レベルの協力に焦点を合わせている。具体的には、第I部で、ドナー側、すなわち世銀(構造調整貸付、千代浦昌道)、アメリカ(USAID、林晃史)、EC(ロメ協定、大隈宏)、北欧諸国(吉田昌夫)、日本(吉田昌夫)による援助の特質について論じている。また、第II部で、アフリカ側の地域協力機構、すなわち「西アフリカ諸国経済共同体(ECOWAS)」「望月克哉」、「西アフリカ経済共同体(CEAO)」「原口武彦」,「中部アフリカ関税・経済同盟」(大林稔)、「東・南部アフリカ特惠貿易地域」(ラジェスワラン)、「南部アフリカ開発調整会議」(林晃史)の現状について論じている。

林 晃史編『冷戦後の国際社会とアフリカ』(アジア経済研究所、一九九六年)

本書は、一九九〇年代の転換を、冷戦終結後の援助国側の援助政策の側面から検証している。本書は、冷戦後の先進国の「アフリカ大陸への関心の低下」が、アフリカ諸国に新たな周辺化の危機をもたらす可能性を指摘しつつ、IMF(高橋基樹)・世銀(林晃史)・主要援助国「イギリス(遠藤貢)、フランス(大林稔)、ドイツ(永原陽子)、アメリカ(小田英郎)、日本(青木一能)」の対アフリカ政策が、冷戦末期から冷戦終結後にどのように変化したかを論じている。本書では、一九九〇年代の展望として、具体的には、貧困削減・グッドガバナンス・WID等の重点化や、アメリカが対アフリカ消極政策に回帰する一方で、日本はTICADを主催するなど対アフリカ関係を強化しつつある点を明らかにしている。

原口武彦編『転換期アフリカの政治経済』(アジア経済研究所、一九九三年)

本書は、援助の前提条件として経済政策上の構造調整に加えて政治的民主化が要請されるようになった「転換期アフリカ」の現状について、コートジボール(原口武彦)、ガーナ(高根務)、ナイジェリア(室井義雄)、ケニア(津田みわ)、タンザニア(吉田昌夫)、ザンビア(小倉充夫)、ジンバブエ(林晃史)の諸事例研究を集めている。

原口武彦編『構造調整とアフリカ農業』(アジア経済研究所、一九九五年)

本書は、構造調整が農業に与えた影響について、タンザニア(池野旬)、ザンビア(児玉谷史朗)、マラウイ(坂本浩

一)、ナイジェリア(望月克哉)、ガーナ(高根務)、コートジボアール(原口武彦)を中心に論じている。アフリカにおける構造調整(佐藤章による概説)は、世銀主導による画一的なものだったが、農業に対する実際の影響は様でなかった。各国が、国内産業全体における農業部門の位置づけ、農業部門への国家介入の様態、民主化プロセス等で異なっていたことにもよる。所収論文は、各々、豊富な統計的データを示しながら、各国農業経済の現状を論じている。

日野舜也『アフリカの小さな町から』(筑摩書房、一九八四年)

カメルーンの農村でペロ・イツサー一家と共に暮らした一年余りの記録。「この記録には、したがって結論などというものはないし、クライマックスなどというものもない。」「わたしはもとより、東洋の片隅の小さな一文化の子。偏見もいっぱいあるし、ものの考え方も一人よがりであることは言うまでもない。でもそのことも自認した上で、蘆の髄からのぞいた天井は、その広さもいくらか想像できるのではないか。わたしは、ここではしばしば自分の偏見もそのままぶつけて、感じたとおりの気持をかくさずに書いてみることにした。ただひとつ、譲れぬ信念はある。どんなに、見てくれは、そして長短は違っていても、人間の心は、美しさも醜さも含めて、万人そう違いはないということである。人びとは、みんな真摯に生きて、衆知を集めて協力して、自分たちの文化を作りあげてきた。その作品には、どれが正しくてすぐれているという価値の違いはないのである。言ってみればみんな正しいし、まちがいであるといってもよい。できれば、こんなに気色ばむことなく、坦々と中身でそれを描きたかったのだが、わたしにはまだその度量はとうていない」。

福井正子『キリントの歌』(河出書房新社、一九八一年)

「よくいわれることだが、ひとがひとをみたり、社会をみることは、自分自身や、自分の帰属する社会をしることにつながる、という意見がある。しかし、それは、ずいぶん短絡的で僭越な考え、といえないだろうか。他人と自分、あるいはよその社会と、またそのよその社会とは、そんなにやすやすと比較したり類型化できるものではない、とわたしは思うようになった。世界は、いろいろに異なっていて、おたがいに割りきれないかたちで存在しているからこそ、すばらしいといえるのではなからうか。ボデイ族のすむ地域一帯を、国立公園にする計画があるととき。しかも、それは、野生動物たちの保護や観光を主体としたものだという。もちろん、じゅうぶん練られたうえでの計画であろうことは信じるが、人口千

人にみたくないボデイ族の存在の重さを、みすごさないでほしいと思う。他人がせっかくなかいていた絵を、自分の絵の具でかつてにぬりかえてしまう乱暴は、ゆるされない」。

福島浩一郎「エチオピアの夜——アカシアの林のむこう側」(東洋出版、一九九九年)

青年海外協力隊員として一九九四～一九九六年にエチオピアに派遣されて、首都アディスアベバでエチオピア政府「都市開発住宅省・住宅調査サービス課」で給排水衛生設備の技術指導に従事。国際協力事業団現地事務所で、「最初のテストケース」の文化人類学専門家として派遣されていた宮脇幸生と出会う。援助活動になぜ文化人類学者か? 「その地域には、どのような人が集まり、どのような土地柄なのか。何を、どのようにして指導して行けば効果のある援助になるのか? 人々の生活環境を知り、人々の持つ価値観を知り、経済を知り、それらを分析する。その結果を基にして開発を計画する」ことを知る。著者は文化人類学者の調査地サウス・オモを訪れたときの深い思い出を胸に、大学で国際関係について勉強し始めている。

藤田弘二編「アフリカ諸国の経済開発」(アジア経済研究所、一九六六年)

アフリカ諸国が相次いで独立した一九六〇年代の国際援助は、着実な経済成長を見込んだ経済開発を基調にしていた。こうした動向は、当時の開発研究にも反映している。本書は、ギニア(上杉聡彦)、南アフリカ(林晃史)、ナイジェリア(入江敏夫)、アルジェリア(宮治一雄)、コンゴ(入江敏夫)を事例とした、経済開発に関する文献調査の成果である。うちギニアについては、経済概観に加えて諸外国による開発援助の動向が詳しく紹介されている。

船田クラークセンさやか「モザンビーク解放闘争史——「統一」と「分裂」の起源を求めて」(御茶の水書房、二〇〇七年)

一九九四年筆者は、和平合意達成後の国連平和維持活動(PKO)の選挙支援担当者として、モザンビークの辺境ニアサ州南部の農村部へ派遣された。一〇カ月の任期を終えてニアサを離れる小型飛行機の上から大地を眺めた瞬間、「我々が発していた「平和」や「民主主義」、「銃弾から投票用紙へ」という言葉が、いかに紛争現場で生きてきた人々の経験や想い、そして願いとかけ離れたものであったか。そもそも、我々は人々の声を一度たりとも立ち止まって聞こうとしただ

ろうか、という問いを抱きつつ目をつぶってみると、筆者が出会った一人一人の住民の眼差し奥に描かれていたあの沈黙に行き着いた」筆者が、一〇余年をかけて「立ち止まって」モザンビーク解放の歴史を現地調査と文献資料から紐解いた研究書。

ピエール・ブラデルバン（犬飼一郎訳）『アフリカに聞き入る——草の根からのアフリカの開發』（めこん、一九九五年）
本書は、ブルキナファソ、マリ、セネガル、ケニア、ジンバブエでの実務経験をもつスイス人が、それらの国々の農村部での聞き取りに基づいて記録したルポルターージュである。著者は、農民たちの発言を随所で紹介しながら、草の根レベルの様々な自助グループの活動実態を描いている。

コーラ・アン・プレスリー（富永智津子訳）『アフリカの女性史』（未來社、一九九九年）

ケニアの独立運動とキクユ社会をジェンダーの視点から描き出した歴史書。キクユ女性によつての植民地主義との闘いは、キクユ社会内部の家父長制との闘いでもあったことを指摘し、女性の地位変革のためのモデルの提起が具体的な項目についてなされている。

A・アドウ・ボアヘン編『ユネスコ アフリカの歴史 第七巻上・下』（同朋舎出版、一九八八年）

二〇世紀におけるアフリカ研究の総決算とも位置づけられるユネスコ『アフリカの歴史』（第一巻～第八巻）のうち、一八八〇年から一九三五年までの植民地支配下のアフリカについてまとめられている巻。植民地支配がアフリカにもたらした影響とその意味について網羅的な理解が可能となる。

フラン・ホスケン（鳥居千代香訳）『女子割礼——因習に呪縛される女性の性と人権』（明石書店、一九九三年）

「女子割礼」は、女性に対する「健康破壊」さらには「人権侵害」であるという観点から、その実態を国際社会に広く認知させた著作。「文化的干渉」と批判されるような対立をさせて、「保健衛生」分野の問題として啓蒙することにより、それまでは無干渉主義をとっていた国連諸機関が「女性と子供の健康に影響する伝統的な慣習」と位置づけ、国際社会が

「女性に対する暴力」と認識しはじめるようになった。割礼に言及するだけで「こうした野蛮的な行為による一生の健康問題」について、一言も触れては「いかなかった人類学者の態度が強く批判されている。

ワンガリ・マータイ(福岡伸一訳)『モッタイナイで地球は緑になる』(木楽舎、二〇〇五年)

NGO「グリーンベルト運動」を創設し、植樹による農村女性の社会参加に成功したケニア人女性ワンガリ・マータイによる活動の記録。科学、実践、政治的なコミットメントに対して示唆的な内容。この活動が評価されて、ケニアの国会議員、環境副大臣に就任した。環境に対する取り組みで初めて、またアフリカ系女性として初めてノーベル平和賞を受賞している。

松沢哲郎『チンパンジーの心』(岩波書店、二〇〇〇年)

人間の言葉や数を理解しコンピューターを使いこなすチンパンジーのアイとその息子アユム、また野外実験による観察を中心としてチンパンジーの心と認識の世界に迫る。内外のチンパンジー研究者は、森林伐採からチンパンジーの生息地を守るための活動も展開するが、筆者はギニアのボツソウにおいて別の群れとの交配を進めるために「緑の回廊」を作る植林事業を推進する。地元民のリーダーシップ、多様な樹種の植林、生業と両立した植林事業であることにも留意されている。

松園万亀雄・緒方貞子「国際協力に民族学の知識と経験を」(対談)(月刊みんぱく、二〇〇七年二月号)

国立民族学博物館開館三〇周年の記念企画のひとつとして催された緒方貞子・国際協力機構(JICA)理事長と松園万亀雄・国立民族学博物館館長の特別対談の記録である。JICAは、緒方理事長の就任後、アフリカ重視の方針を打ち出し、総事業費にしめるアフリカ支援費の割合を一五パーセントから二一パーセントに増額した。本対談では、アフリカ支援分野での特別なニーズや、日本の国際協力における人材育成の課題等について、さらには民族学・文化人類学と開発実務との協力関係について意見交換が行われた。

松田素二「抵抗する都市——ナイロビ移民の世界から」(岩波書店、一九九九年)

アフリカに対する開発援助にまつわる戦略と、植民地支配のための策略には著しい類似を見出すことができ、「伝道型」「人材育成型」「住民参加型」という援助戦略の変遷も、じつはヨーロッパによるアフリカ植民地支配の歴史のなかで確認される支配理念の変遷とパラレルであると指摘する。ナイロビの都市出稼ぎ民の日常生活における抵抗実践を描いた上で、二一世紀の人類学は、社会に対して積極的に関与し参加するものにならなければならないと主張する。「日常性の共有を通して、自分たちを支配しようとする強力で巨大な力と向き合う術である」フィールドワークを通じて、「お互いが自由になり、自分自身と社会を変革していく契機が生まれる」という。

水野一晴編『アフリカ自然学』(古今書院、二〇〇五年)

山越言「ギニアの精霊の森に暮らすチンパンジー」では、アフリカにおける自然保護行政と地域住民との間に深刻な対立が存在する点を指摘し、住民が主体的に保全してきた「神聖な森」あるいは「伝統的森林保護区」が、多くの課題を抱えるトップダウンの自然保護区に対する「オルタナティブな」保全アプローチとなることをギニア・ボソソウの事例から明らかにする。宇野大介「短稈と長稈、二つのトウジンビエが併存する理由」では、ナミビア北部オヴァンボランドにおいては、食料の確保という一面だけを見たら効率の悪い在来種が、家畜飼料として複合的生業形態の維持に重要な役割を担っていることを示し、トウジンビエの在来種と改良品種を併存させて不規則な降雨パターンに対処する農家の戦略の意味について論じている。

緑資源公団『サヘル地域砂漠化防止対策技術集』(緑資源公団、二〇〇一年)

計画策定、住民組織育成、水資源開発、水資源利用、農地保全、農業技術、牧畜技術、植林技術といった項目ごとにまとめられた、サヘル地域における砂漠化防止のための技術マニュアル。

峯 陽一『現代アフリカと開発経済学——市場経済の荒波のなかで』(日本評論社、一九九九年)

開発経済学者、とくにW・アーサー・ルイス、アルバート・O・ハーシュマン、ならびにアマルティア・センの理論を

比較検討しながら、現代アフリカの小農輸出経済、都市化と労働市場、累積債務、民主化、飢饉、市場経済化の展望等を論じている。

宮本正興・松田素二編『現代アフリカの社会変動——ことばと文化の動態観察』（人文書院、二〇〇二年）

本書の第三部は「開発と環境の現在」に充てられており、なかでも赤阪賢はマリにおける識字教育・地方分権化・女性に対する自立支援や日本による草の根無償援助協力の現状を報告しており、三島禎子はセネガルの農業開発への農民の参加と政府の介入の性質について批判的に検討している。

望月克也編『アフリカにおける「人間の安全保障」の射程——研究会中間成果報告』（アジア経済研究所、二〇〇四年）

紛争問題と平和構築の観点から人間の安全保障にアプローチした本書は、国連人間の安全保障委員会が二〇〇三年に発表した報告書（Human Security Now）を受けて、アフリカにおける「人間の安全保障」概念の適用可能性について、主として紛争問題からアプローチしたものである。具体的には、ルワンダにおける平和構築（篠田英朗）、国内紛争における予防外交の展開（平井照水）、カナダ政府による人道的介入（滝澤美佐子）、ルワンダにおける難民問題（武内進一）、ナイジェリアの地域社会における住民対立（望月克也）、エチオピア農村部における食糧安全保障（石原美奈子）について検討している。なお、本書の内容を発展させたものが望月克也編『人間の安全保障の射程——アフリカにおける課題』（アジア経済研究所、二〇〇六年）である。

諸石和生『エチオピアで井戸を掘る』（草思社、一九九一年）

エチオピアの飢餓救済が世界的に叫ばれていた一九八二〜一九八六年にかけて、青年海外協力隊員としてエチオピアで地下水開発（井戸掘り）に従事した際の体験をせきららに語った作品。「生活が困難になったとき、どこか遠いところに行けば何とかなるのではと、淡い希望とも夢ともいえるようなものを抱」き現地に赴いた著者は、革命政府、反政府ゲリラ、医者、薬屋、救援ボランティア、スパイ、写真家、報道記者、商社マン、宗教家、外交官らが、「早魘を利用」して「飢餓難民の上に襲いかかる」醜態に出会う。その経験を「アジスアベバの寂しい街角の、蠟燭に揺らめくブンナベット

のほの暗い部屋で、女たちがつまらない身の上話を、自分がなに者であるかを、語りつづけねばならなかったように」語る。

山極壽一「ゴリラ雑学ノート——「森の巨人」の知られざる素顔」(ダイヤモンド社、一九九八年)

「ゴリラを絶滅の危機から救え」では、ゴリラに「保護のシンボル」となってもらって、熱帯雨林の破壊を抑え、生物多様性を維持していく枠組みが示され、地元の人々の協力やエコ・ツーリズムの推進の道が示されている。また、ゴリラの保護のために活動している世界のNGO、まだ自身が関わるNGO「ボレボレ基金」の紹介もある。

吉田昌夫編「適正技術と経済開発——現代アフリカにおける課題」(アジア経済研究所、一九八六年)

一九八〇年代以降、経済危機の現状分析と同時に、アフリカに対する従来型の画一的な援助に対する反省のうえに多角的な観点から開発問題に関する研究が行われるようになった。本書は、当時注目されるようになった「適正技術」論の歴史的背景(吉田昌夫)を示したうえで、具体例として、サバンナ農耕文化における牛耕(犁耕)の導入(半澤和夫)、衣料生産(タンザニア、古沢紘造)、製粉技術(ケニア、児玉谷史朗)、鍛冶技術と土器製造(タンザニア、吉田昌夫)、UNICEFによる農村技術開発の取り組み(タンザニア、森本栄二)、工業立地と均衡発展の条件(ナイジェリア、島田周平)、技術教育と職業訓練(ケニア、犬飼一郎)について論じている。

吉田昌夫編「八〇年代アフリカ諸国の経済危機と開発政策」(アジア経済研究所、一九八七年)

アフリカ経済は、二度のオイルショック等により一九七〇年代に停滞し、一九八〇年代には深刻な危機に陥った。そうした動向を受けて、本書は、アフリカ国家の経済危機(国際収支、財政、対外債務、国民の不満増大、飢餓、援助依存、政治紛争など)に関連する経済危機などの原因ならびにそれに対する国家政策について論じている。本書は、アフリカ諸国の内生的問題を重視しながら、国家と農民との関係、中央と地域との関係も視野に入れた分析を行った。具体的には、タンザニアの経済危機に対する政策的対応(吉田昌夫)、ザイールに対するIMFプログラムの特徴(大林稔)、ザンビアの開発計画における構造的課題(小倉充夫)、ジンバブエにおける土地政策と鉱業政策(林晃史)、ガーナにおける農政の

基本方針と農民の視点とのズレ（細見眞也）、ナイジェリアの大規模灌漑計画の農村に対する影響（室井義雄）、ケニアにおける乾燥地開発における計画立案・実施上の諸問題（池野旬）、コートジボアールにおける棉花栽培の導入の地域社会への影響（原口武彦）について論じている。

吉田昌夫・小林弘一・古沢鉦造編『よみがえるアフリカ』（日本貿易振興会、一九九三年）

アフリカ人にとっての環境問題、民衆の暮らしと民主化、農民のポリティカル・エコロジー、草の根の女性自助グループ、緊急援助の受け手たち、南アフリカの夜明け、開発政策、日本・アフリカ交流史、日本のアフリカ向け援助、など、アフリカの経済開発にとっての課題が多角的に平易な文章で解説されている。ジェトロ・アフリカ経済研究会での成果をもとに、「よみがえらうとするアフリカにわれわれがどうかかわりあえるのかを明らかにしよう」という試みである。

米山俊直『アフリカ学への招待』（日本放送出版協会、一九八六年）

アフリカ学の構築を目指して執筆された本書の最終章「世界・アフリカ・日本」では、「日本はアフリカに植民地をもつていなかった。その意味で日本人が明治以来朝鮮半島、台湾、中国東北部、あるいは第二次世界大戦中の東南アジア諸地域でもった関係のような、旧侵略者としてのコンプレックスをもたずに、いわば第三者的にアフリカをみることができる。」〔中略〕しかし、ただ第三者的にみているのではないことは、世界が連動している今日ではいまでもない」と述べている。

和崎洋一『スワヒリの世界にて』（日本放送出版協会、一九七九年）

一九六三年タンザニア北部マンゴラ村に「草原の寺子屋」を開いて、ここの子どもたちに「読み・書き・算数」を教えながら、バンツー系諸部族によって形成される農耕社会のなかに、村人とのつきあいの関係を構築する。「社会人類学上の現地調査を進めるために、われわれはまず何よりもそこに住民との生活をともにする足場をもたねばならない。」住民とともにする生活」は、何よりもまず調査のための手段であつたけれど、あれから一〇年たったいま、手段だけの生活だったと割り切る気持にわたしはなれない。」「ケチくさい」「学術調査」とは無縁の、アフリカの業とでもいふべきものを、

わたしは感じてゐる」。足掛け一五年以上の村人とのつきあいを振り返り描き出される、スワヒリ世界の人びとの生活と人生。

和田正平編『アフリカ女性の民族誌——伝統と近代化のはざままで』（明石書店、一九九六年）

嶋田義仁は、カメルーン国北部のレイ・ブーバ王国イスラム王朝社会に見られる一夫多妻制を、多婚と労働の分担、多婚と出産・育児の分担、多婚と少産・長命戦略、といった点について記述し「フェミニズム」の視点から考察する。小川了は、セネガルの首都ダカールに住む「貧困」層の女性たちがどのようにして日々の生活を防衛しているかについて述べている。戸田真紀子は、エジプトの女性活動家ナワル・エル・サーダウイが描くエジプト女性の抑圧の状況について言及する。

ナボス・ングルーベ（塚田幸三訳）『アフリカの文化と開発——苦悩からの脱出』（荒竹出版、二〇〇〇年）

本書は、アフリカの開発における文化の働きについて述べるとともに、政治行政における倫理やアカウンタビリテイの必要性を説いている。著者は、政府官僚としての経歴を持つザンビア人であり、訳者は青年海外協力隊員ならびに国際協力事業団の職員としてザンビア勤務の経験を持つ。